

4 碑文の声を聞く

高島 淳

たかしま じゅん / AA 研

インド系文字の伝来を物語る証人である碑文たち。未解読言語の記された碑文が密やかに語る謎を聞き取るとマダガスカルへの道が見えてくる？

インドから東南アジアへ

歴史的に見ると、東南アジアへのインド文化の伝来は、紀元2世紀ころに始まったようである。それは、ローマからインドへの季節風交易の延長として、南インドからマレー半島のクラ地峡に上陸し、幅45キロほどの陸地を横断してタイのバンドン湾から再度船出して対岸のベトナム南部のオケオ地域などとの交易として始まったと推測される。オケオから出土したローマ貨幣などがそうした交易を物語っている。

その後4~5世紀にかけては、インドと東南アジアとの交流が大きく進展し、各地にインド文化の影響を受けたことを物語る碑文などが見られるようになる。そうした碑文は当時の南インドでサンスクリット語を記すために用いられていたいわゆるパッラヴァ・グランタ文字の一種で書かれていた。言語は大部分がサンスクリット語である。ベトナム南部のニャチャン近くで発見されたヴォー・カイン碑文は、字体的特徴から3世紀あるいは4世紀のものとして推定されている。また、5世紀前半と推定されるムーラヴァルマン王碑文がカリマンタン（ボルネオ）島の東海岸のマハカ

ム河流域のクタイから発見されていることなど、インド文化の影響の広がりが想像されるよりも広範囲に及んでいたことがわかる。

シュリーヴィジャヤ碑文

7世紀になると海上交易で大きな利益をあげる国家が現れる。マレー人によるシュリーヴィジャヤ王国である。シュリーヴィジャヤの王たちはサンスクリットではなく自分たちの言語（いわゆる古マレー語）で碑文を刻ませた。文字は従来からそれほど変わらない、いわゆるパッラヴァ・グランタ文字で書かれている。全部で7つほどの碑文が知られているが、年代の書かれているもののうち、もっとも古いものが、スマトラ島のパレンバン町の南西にある丘のふもとで発見されたクドゥカン・ブキット碑文である。そこでは、682年4月から王が遠征に発ち、2万人以上の軍隊を伴う船での進軍の結果、6月にある場所に町を興した、そしてシュリーヴィジャヤの繁栄 [文末不鮮明]、と語られている。これは、おそらく、それまでマレー半島にあったシュリーヴィジャヤの国が、スマトラ島パレンバン周辺を征服し、首都をパレンバンに移したことを述べているものであろう。

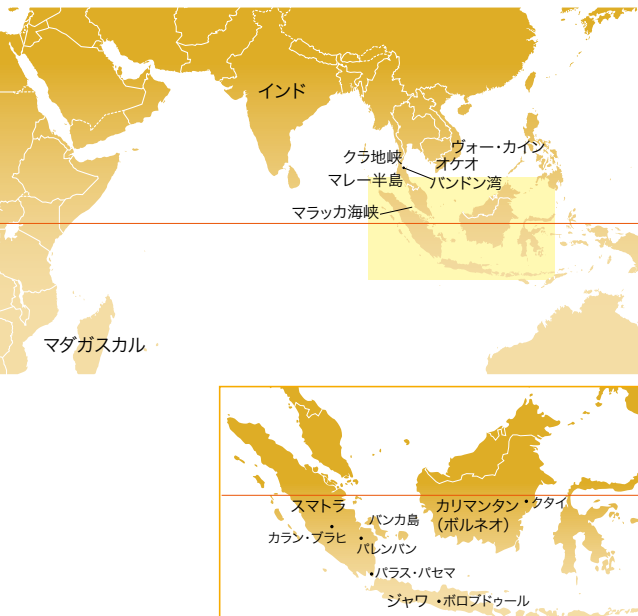
さて、その他のシュリーヴィジャヤ碑文のうち4つに、その他の部分と同じ文字であるが、謎の言語（シュリーヴィジャヤ碑文言語Bと呼ばれている）で書かれた短い文章が冒頭におかれている。当初は、判読不能な形で書かれた呪文などと解釈されたが、s音がまっ

たく存在しない代わりにh音が多数出てくることなどから、マレー語と同じオーストロネシア語族の言語で、類似した音韻変化法則に従って変化した言語として解釈が可能である、という研究が言語学者によって進められた。そして、類縁性の観点から、もっとも近い言語はマダガスカルの言語（しばしばマルガシュ語と呼ばれる）であることが、広く認められるようになった。

またマダガスカルの言語の研究から始めてオーストロネシア諸語との比較を行なったノルウェーの学者ダールは、もっとも類似しているのはカリマンタン島南部のマニヤーン語であるとしている。彼の説では、そこに、この碑文についての知見を加えて、カリマンタン島から、バンカ島（スマトラ島東南部の北側に隣接する小島でシュリーヴィジャヤ碑文言語Bを含む碑文の一つコタ・カプール碑文の発見地）への移住、そこからマダガスカル島への移住というシナリオを描いている。

しかしながら、シュリーヴィジャヤ碑文言語Bを含む4つの碑文は、バンカ島の他に、首都であったろうパレンバン、スマトラ島の東南の端にあたるパラス・バセマ、スマトラ島中央部に近いカラン・ブラヒという離れた地点からも見つかっている。こうしてみると、カリマンタン島からの移住などを想定するまでもなく、当時のスマトラ島沿海地帯の住民の言葉であったと解釈する方が自然であると思われる。

さらに、シュリーヴィジャヤ碑文言語Bで



インドネシアのジャワ島、プランバナン寺院群の中心にあるロロ・ジョングラン寺院。9世紀に建てられたシヴァを主神とするヒンドゥー教の寺院。ポロブドゥールに見られるように大乘仏教が盛んだった時代の後にジャワ島ではしばらくヒンドゥー教が中心となる時代が続く。





コタ・カプール碑文（インドネシア国立博物館所蔵）シュリーヴィジャヤ碑文言語Bの書かれた面。（本来は右側を下として建てられていた）（写真撮影：Martijn、作品タイトル：Prasasti Kota Kapur、出典：http://en.wikipedia.org/wiki/File:Prasasti_Kota_Kapur.jpgよりCreative Commons license）

述べられていることについて、フランスの言語学者ダメの1968年の論文の試訳に基づいて検討してみると、中心的内容は古マレー語部分と同じで、王に従えば富などが得られるが、従わない場合には恐ろしい呪いがある、ということである。つまり、上述したクドゥカン・ブキット碑文の内容から推測すると、マレー半島など別の地方からやって来て、スマトラ島を支配下においたばかりのシュリーヴィジャヤの王が地方の領主たちに服属を要求するために彼ら自身の言葉で誓いを行なわせたのである。さらに、その服従の誓いの呪術的永続性を増すために、文字という新規の技術的手段に訴えているものであろう。

マダガスカルへ

ところで、遠く離れたマダガスカルにマレー諸語と類縁の言語を話す人々が暮らしているというのは考えてみれば不思議であって、いくつかの仮説が出されているものの、詳しいことはわかっていない。

コタ・カプール碑文の末尾には、いまだ従わないジャワ島に向けて征服の軍隊を送る日に、という日付（686年2月28日）が書かれている。新たに服従させた人々を掌握するための最良の手段は別の敵を征服することで彼らに戦利品を与えることであり、このシュリーヴィジャヤ碑文言語Bを話していた人々は、この時、上記クドゥカン・ブキット碑文の「2万」といった数でジャワ島への遠征軍に加わったのではないだろうか。当時のジャ

ワ島の中心はボロブドゥールなどのある南岸方面であったと考えられるので、遠征艦隊（20人乗りのアウトリガー・カヌー1000隻？）はスマトラ島とジャワ島間のスダダ海峡を抜けて、南に回ったことであろう。

さてそこで嵐に遭遇して陸地から離れてしまったとすると、運を天に任せて、風と海流の力を最大限に利用して前進することが生き延びるための最良の手段である。この地帯においては一年のどの季節においても東から西に、風も海流も流れており、20日程度でマダガスカルに到着するのは比較的容易であったはずである。たとえば艦隊の一部、千名からなる集団がまとまってマダガスカルまでたどり着くようなこともありえないことではない。

このような仮説は、昔ならば単なる夢物語で終わることだが、近年では遺伝子的研究によって証明することが可能であろう。戦隊のメンバーは男だけだったと仮定できるので、遺伝子分析の結果もしもY染色体に特異な分布が見られれば、男ばかりの集団が移住した可能性が高くなるからである。マダガスカルへの移住についての可能性を探る最初の遺伝子的研究は2005年に発表されたものがあるが、そこではY染色体の特徴的な分布は見られないとのことであった。しかし、2009年に発表されたピサ大学のトファネッリらの研究によると、マダガスカルへのオーストロネシア系の人々の移住は、最低2波以上でなされたこととされる。全体の大枠としての数値シミュレーションの結論は、200~1000人に

よって1000年から3000年前に移住がなされたということである。その中で最初の移住は2000~3000年前に、現在のモルッカ諸島住民との類縁性の高い人々（男女同数）によってなされ、ついで、西暦紀元以降に男性を中心とした別の移住の一波がマレー半島付近住民と近い人々によってなされた可能性が充分ある、と推定している。

近年では遺伝子的研究における倫理規定が厳しいため、なかなかサンプリングできる人数を増やすことができず、上記の研究の確度は充分なものではないが、追加的に研究がなされれば、私の仮説を明確に証明してくれるようになるのではないかと期待している。

なぜなら、マダガスカル文化には奇妙な点がいくつかある。たとえば稲作儀礼がほとんど欠落していることとか、稲と米をインドネシア諸語のように別々の言葉で表さず一つの言葉しか持たない上に、その言葉の起源がオーストロネシア語族において「米」「飯」を表す言葉に由来していることなどである。こうしたマダガスカル文化伝統におけるある種の欠損は、儀礼的伝統を十分に習得していない若い男性戦士の集団の移住のみによって稲作を含む文化の層が伝えられたとすれば理解できるのである。

石に刻まれた碑文が直接に語ることは限られているかもしれないが、遺伝子学など幅広い学問の声にも耳を傾ければ、隠れた声も聞こえてくるのである。



ベトナム南部、ファンラン郊外の丘に建つボークロンガライ寺院主祠堂の正面。シヴァ神を祀る寺院で、入口の上にも踊るシヴァ神の浮彫がある。入口両脇の石柱にはそれぞれ3面にチャム文字で、13世紀のジャヤシンハヴァルマン3世王の寄進を記したチャム語の碑文が刻まれている。

マダガスカル島の帆走アウトリガー・カヌー。転覆防止のためのウキが片側にしかないのは、よほど太い支柱で取り付けないと、大波などで片側が浮き上がったときにそちら側の支柱が折れてしまうからだ。（撮影：深澤秀夫）

